

史料によるペトロ・カスイ岐部殉教までの道のり

—ペトロ・カスイ岐部と187殉教者の列福への期待から—

片 岡 瑠美子

The Path to Martyrdom—An Historical Analysis of Father Peter Cassui Kibe: A Call to Beatify Fr.Kibe and the Other 187 Martyrs

Rumiko KATAOKA

はじめに

- I 殉教者列福調査委員会の設置
- II、史料によるペトロ岐部の足跡—歴史的調査の中から
- III、ペトロ岐部の今日性
- まとめ

はじめに

2005年3月13日付「カトリック新聞」の1面に、以下の記事が写真とともに掲載された。

ペトロ・カスイ岐部と187殉教者の列福を推進する 殉教者列福調査特別委員会の溝部脩司教と宮原良治司教らは、2月26日、教皇庁に国務省長官アンジェロ・ソダーノ枢機卿を訪ね、手続き推進を要請した。同長官は、日本の教会のために殉教者の列福は必要との見解を示した。必要な公式調査書は既に完成し、列福省歴史部会は、賛成多数で列福を可としている。溝部司教は、2007年には列福の可能性がでてきたとの見通しを示した。

これに対し、4月13日付同紙の「声」欄に、「あらたな列福の推進には反対」という外国人の意見が載った。その理由の1つは、日本の教会には「2月5日の日本26聖人殉教者、9月10日の日本205福者殉教者、同28日の聖トマス西と15殉教者、合わせて247人が列福・列聖されている。彼らが無名の殉教者を十分代表していると思う」ということであり。さらに、「殉教者は過去を振り返るより宣教するように望んでいる。日本の教会では前向きに未来を見据えるより後向きに記念する姿勢が強い」という内容であった。

その後のカトリック新聞には、この反論に対する「声」が続いた。

これらの記事を通して、「列福」の意義と特徴を考えさせられた。

I、殉教者列福調査委員会の設置

(1)「日本殉教者列福調査委員会」の発足とその意義

「日本殉教者列福調査委員会」は、1986年に発足した。

その委員会の目的・使命については、「日本の教会史上、その信仰と証しの生涯を記念すべき殉教者は、26聖人や205福者のほかにも数多くいる⁽¹⁾。その足跡にふさわしい列福を促進」⁽²⁾ することであると記されている。

日本の殉教者の列聖・列福については、教皇ウルバノ8世が、1627年9月14日付でフランシスコ会関係者23名を、15日付でイエズス会の3名の殉教者を列福する小勅書Breveによって列福した⁽³⁾。19世紀、日本の開国が近いと察した教皇庁は、日本での再布教を考え、1862年、福者である日本26殉教者を聖人の列に加えた。

そして、1867年5月7日の小勅書Breveをもってピオ9世は、205名の殉教者を福者と宣言したが、その基礎となった資料は、1628年にマニラ、マカオにおいて集められた日本殉教者の証言を集めたマドリッドの調査資料であった。205福者の中には、当時日本で宣教活動をしていたドミニコ会、フランシスコ会、アウグスチノ会、イエズス会の4つの会の殉教者が含まれており、さらに、日本人の司祭、修道者、第三会員、信徒家族が多いということ注目すべきことであるが、ここにいくつかの問題点が指摘される。まずは、4つの修道会がそれぞれの殉教者を調査したため外国人宣教師とその協力者であった日本人カテキスタ、同宿などが多くなり、迫害が全国一斉に行なわれたにもかかわらず、そのほとんどが長崎を中心とした限られた範囲の殉教者しかあがっていないことである。また、修道会関係の調査であって、時代的に日本の教会はかかわっていなかったことである。さらに考えるべきは、205福者は、1632年までの殉教者しか含まれていないことである⁽⁴⁾。

それは、国を閉ざして迫害が続いている日本での殉教者の調査には限界があり、列福調査は205名の列福で打ち切られていたのである。

近年、キリシタン関係の研究が盛んになり、新たな史料が発掘されて、日本の各小教区でも殉教者の記念が行なわれていたが、1981年、教皇ヨハネ・パウロ2世はマニラの公式訪問に際し、ドミニコ会関係の日本殉教者16名を列福した。そして、1987年10月18日は、バチカンの聖ペトロ大聖堂で列聖した。この際も、ドミニコ会が調査・申請したものであった。日本カトリック教会はこれを機に、殉教者列福の運動の輪を広げることを決意した。そこで設置されたのが、冒頭に挙げた「日本殉教者列福調査委員会」であった。

委員会は、日本全教区から、英雄的な証をもって殉教した日本人司祭たちを優先し、男子信徒、女子信徒、子どもたちのなかから史料が確かな殉教者を候補とした。江戸時代までの殉教者の場合は、信仰のために殉教したという確実な史料が重要なため、歴史調査委員が任命された。その結果、11教区から推薦された各層の殉教者188名が調査の対象として採択された。列福対象者として調査が開始された殉教者188名は、鹿児島教区 レオ税所七右衛門、大分・東京教区 ペトロ岐部神父、長崎教区 ガスパス西玄可と家族3人、有馬の殉教者8人、雲仙の殉教者29人、ミゲ

ル薬屋とニコライ永原、ジュリアン中浦神父、トマス次兵衛神父、福岡教区 八代の殉教者11人、アダム荒川、ディエゴ加賀山隼人、小笠原玄也と家族15人、広島教区 熊谷元直とダミアン、フランシスコ遠山、高松・大阪教区 ディエゴ結城神父、京都教区 京都の大殉教者52人、横浜・東京教区 原主水胤信、新潟教区 米沢の殉教者53人となっている⁽⁵⁾。以上、述べてきたように、205殉教者の列福までに調査が間に合わなかった殉教者たち、1632年以降、とくに危害が厳しくなってきた殉教者たちを候補としている。

列福の手続きは申請人が教皇庁に正式に申請することによって開始されるが、今回の188名の殉教者のためには、大分教区長平山高明司教が申請人となって、教皇庁と日本司教団に正式の依頼を行ない、「日本殉教者列福調査委員会」が発足した。

(2) 殉教者とはなにか

1997年8月15日付で教皇ヨハネ・パウロ2世が認証・公布した『カトリック教会のカテキズム』Catechismus Catholicae Ecclesiae（日本語訳は、日本カトリック司教協議会教理委員会訳・監修で2002年7月31日発行）の2473条には、「殉教とは信仰の真理を表すための最高のあかしであり、死ぬことさえも惜しまないあかしを意味します。殉教者は死んで復活されたキリストと愛によって結ばれ、そのキリストをあかしします。彼らは信仰の真理ならびにキリスト教の教えをあかしします。勇気ある行為をもって死を耐え忍ぶのです」と教えている。

日本においては、キリシタン時代、早くから殉教者への崇敬は行なわれていた。殉教者のことをマルチルと呼び、丸血留などの漢字が当てられた。ポルトガル語をそのまま用いたのであるが、ラテン語のMartyrに由来し、さらにギリシア語の「Martys 証人」から来ている。つまり、上記にいう「あかし」する人、「勇気ある行為をもって死を耐え忍び」、「信仰の真理ならびにキリストの教えをあかし」する人々のことである。その殉教については、活版印刷機で刊行されたキリシタン版の最初のものの1つである『サントスの御作業の内抜書』では、ヨーロッパで中世に編集された殉教者たちの伝記などを編集して殉教者の事跡を紹介している。また、250年におよぶ信仰弾圧の中で伝えてきた「マルチリヨの葉」では、殉教とは何か、殉教の条件、殉教の心得などが明確に教えられており、殉教教育が行なわれていたことを示している。

教会は、可能なかぎり殉教の目撃者の証言を積極的に収集し、殉教報告が作成され、ローマのイエズス会本部に送られた。また、1598年来日したルイス・セルケイラ司教は、司教として殉教報告書を作成し、教皇庁に送っている。

(3) 列聖・列福とはなにか

カトリック教会の教会法では、「教会は神の民の聖化を涵養する為に、キリストが全人類の母と定めた神の母、(中略)他の聖人たちに対する真の正しい崇敬を奨励する。キリスト信者が確かにその模範によって薫陶され、その取り次ぎによって助けられるためである」⁽⁶⁾と聖人崇敬の目的を定め、「教会の権威者によって聖人または福者の名簿に記載された神のしもべのみを公

的崇敬をもって尊敬することが許される」(1187条)としている。

この「教会の権威者」つまり、教皇によって聖人または福者の名簿に記載される」ことを列聖または列福といい、そのためには、カトリック信徒が、存命中、キリスト教的諸徳を実践してイエス・キリストに対する信仰を公に表明した(証聖者)こと、または「教えのために投獄中や拷問によって絶命したことが証明され、定められた手続きを得て宣言されなければならない」⁽⁷⁾。この列福宣言にいたるまでには、その人物の生涯・徳行・著作物・聖徳の評判について長年にわたる調査が行なわれる⁽⁸⁾。

(4) 教皇ヨハネ・パウロ2世と殉教者

ヨハネ・パウロ2世の教皇在位は、1978年から2005年までの28年の長期にわたったが、その間に、世界数十カ国の470人以上を列聖し、1,300人以上を列福した。在位期間が長期であったとしてもこの数は驚くほど多い⁽⁹⁾。

その教皇ヨハネ・パウロ2世が、1981年2月26日、西坂の殉教地を訪れたとき、「この殉教の記念碑の前で祈りと反省の時を過ごしながら、私は彼らの生涯における神のお恵みの秘儀を深く味わい、彼らが私と全教会に語りかける言葉、数百年を経て、今なお生きている彼らのメッセージを聞きたいと思っています」と述べている。この言葉の中に、「今、列福が行なわれる」意義を汲み取ることが出来よう。「数百年を経て、今なお生きているメッセージ」を聴くためである。

そして、教皇は、「きょう、私はこの殉教者の丘で、愛がこの世で最高の価値をもつことを、高らかに宣言したいと思います。この聖なる地で各階層の人々が、愛は死よりも強いことを証明しました。…彼らを仰ぎ見るすべての人に、神への無私の愛と隣人への愛に基づいて、自分の生涯をつくりかえるよう刺激を与えているのです。…数世紀前、この丘の十字架が当時の目撃者たちに語りかけたように、この記念碑が現代人の心に訴え語りかけるようにと願いながら、この西坂を訪れ祈っています」と。そして、西坂の殉教地を「至福の丘」と名づけた⁽¹⁰⁾。

(5) 「殉教者列福調査特別委員会」の発足とその任務

日本カトリック教会は、1986年に「日本殉教者列福調査委員会」を発足させ、188名の殉教者の歴史的資料調査と神学的調査を進めてきた。その結果として、2005年2月、日本の全現役司教名の嘆願書を列聖省と教皇庁国務省の各長官に提出した。

1986年から2005年までには、幾人かの教区司教の交代もあり、10月18日付で、日本カトリック司教団は「殉教者列福調査特別委員会(委員長 溝部 脩高松教区司教)」を再編発足させて、「ペトロ岐部と187殉教者」の列福審査の促進と国内の教会における関心の喚起を図ることとしたのである。

委員会は、188殉教者の列福を審査するための歴史的調査資料などを掲載したpositioを完成し、印刷・製本を終えたことを発表した⁽¹¹⁾。

600ページを越す本文と30ページに渡る写真資料から成るこのpositioは、教皇庁列聖省の名前

で発行され、列聖省による公式審査が行なわれることになる。教皇庁列聖省Congregatio de Causis Sanctorumは、規定に従い、神のしもべたちの列聖手続きを行なう。

Ⅱ、史料によるペトロ岐部の足跡—歴史的調査の中から

188名の殉教者について、その生涯と信仰のために殉教したという確実な史料の検証が行なわれ、さらに教区において、現在、どのように尊敬されているかの証言が集められ、Positioの作成、提出がなされた。

今はまだ、Positioを読むことは出来ないが、これから述べるのは、その準備の段階で発表されてきた史料を基に、イエズス会司祭ペトロ・カスイ岐部を歴史上の人物として描く試みである。

「キベヘイトロはコロヒ不申候、ツルシ殺され候」

これは、ペトロ岐部を尋問し、残酷な処刑を命じた宗門改役井上筑後守その人が書き残した、1639年7月の江戸における出来事、ペトロ岐部殉教の証言である。

(1) 司祭叙階とイエズス会入会

ヨーロッパの史料に、ペトロ・カスイの名が現れるのは、1620年11月1日の司祭叙階の記録である。それは、ローマ大司教区記録所にある「1618年より1622年までの司祭叙階記録」Romae, Tabularium Vicariatus Urbis. Cod. Ms⁽¹²⁾のなかに、

日曜日、前記のペトロ・カスイは許可状なしに云々、諸教皇令の権限により云々、試験によって適性を確かめたうえ、我等のいと聖なる主の聖母マリア聖堂（サンタ・マリア・マジョウーレ）の香部屋において、イテリウム名義司教パウルス・デ・クルテの手により、副助祭の聖品を授けられた。

11月8日、日曜日、ラテラン教会の香部屋にある小聖堂において、ヒヤシント名義司教ラファエル・イニチアトゥムの手によって、助祭の聖品を授けられた。

11月15日、日曜日、同所において同司教により、司祭の聖品を授けられた。
と記されている。

次にローマのイエズス会文書館の「1620年、パードレ・ペトロ岐部カスイの所持品目録」に、修練院に入ったときの所持品が記録され、最後に、「私、ペトロは上記の通りであることを承認いたします」という自筆の一行がある⁽¹³⁾。

1099番 パードレ・ピエトロ・カスイ、日本人、33歳。1620年11月21日に聖アンドレア〔修練院〕に入った。彼は帽子1個、胴服1着、及び毛織物のマント〔1着〕、ズボン1着、及びラシャのズボン下〔1着〕、靴1足、反転した房飾りのあるシャツ1着を所持していた。

司祭叙階後すぐにイエズス会修練院に入り、2年後の1623年作成の「ローマ・聖アンドレア〔修練院〕修練者名簿」に、「パーテル・ペトロ・カスイ、日本人、35歳。体力は良好、1620年11月20日ローマにおいてイエズス会入会が承認された。倫理神学2年生」と記されている⁽¹⁴⁾。

そして、ローマのイエズス会本部文書館には、ペトロ岐部自身が語る「由緒並びに召命に関する小報告〔1620年11月20日付〕」が保管されている。自筆の身上書なので、ここに全文を紹介したい。原文はラテン語であるが、『大分県先哲叢書 ペトロ岐部カスイ 資料編』に掲載されて翻訳文を引用する⁽¹⁵⁾。

- 1、私の名はペトロ・カスイ、父ロマノ岐部、母マリア波多の子、当年33歳。生れは日本の豊後国浦辺。
- 2、信心に関しては、私は毎日それぞれのロザリオを唱え、またほかの聖人たちに他の祈禱を献げ、土曜日には大齋を行なうほかは、特別なものはない。
- 3、入会の動機は、私の自由な決心である。すでに14年前に、自分から進んでそのような願を立てた。そのために、ポルトガル〔関連事項担当〕顧問マスカレニャス神父作成の誓願文を使った。
- 4、体に関しては、労苦にでも堪えることができる。
- 5、神の賜物に関しては、数えきれないほど特別に私のため与え給うたことを感じている。と言うのは、数多くかついろいろな労苦と危険から開放されて、ようやく、イエズス会の修練者に加えていただいたからである。
- 6、自分の召命に満足しており、また自分の救霊および同胞のそのために進歩したいという大きな希望をもっている。

日本人ペトロ・カスイ
(他人の手で加筆) 日本の殉教者

ペトロ岐部は、1620年11月15日のラテラノ大聖堂における司祭叙階後5日目にイエズス会に受け入れられたことになる。身上書は入会時に書いたものであろう。

この身上書からペトロ岐部の履歴が少しだけ明らかになった。

(2) ペトロ岐部の故郷—豊後国浦辺とその家族

「父ロマノ岐部」

国東半島の岐部浦にきた紀氏は、その地名を家名として、岐部の城山を根拠地に、その周辺に農業を営み、大友時代には近隣諸氏とともに、豊後の水軍「浦辺衆」を形成した。

歴代の城主と思われる岐部山城守、岐部能登守の名が、菩提寺の位牌や豊後の古記録に残っている。岐部の最後の城主、岐部左近大夫は1600年、大友義統のために忠誠を尽くし石垣原の戦いで討ち死にした。ペトロ岐部の父ロマノ岐部は、この左近大夫の一族に当たる⁽¹⁶⁾。

1584年度イエズス会日本年度報告書によると、「浦辺」におけるキリスト教宣教は、1584年、

「〔フランシスコ〕王は、豊後国の端にある浦辺（Urabe）の土地に一人のイルマンが赴くように要請」したことによって始まった。「そして同地にデウスの教えが必ず広まるにちがいないと期待」されていた⁽¹⁷⁾。

そして、翌年には、「異教徒たちの土地である浦辺において、一人の善良な人物がキリスト教徒になりました。…自分の家に戻った時、妻や家族に対して救いの道を見出したと言って、彼が理解していたことを語り、…彼は私たちの公教要理をほとんど彼らに教えこみました。なぜなら、すべての者がすでに日曜日を守っていましたし、彼の妻は金曜日にはたいていジシピリナ（鞭打ちの苦行）を行ない、この他に断食をすることもあり、また聖母マリアのロザリオの祈りを唱えていたからです」と報告され、同じ年報のなかに、「一人のパードレと別のイルマンがその地に行き、十分な慰めを与えて彼ら全員に洗礼を授け」、彼の一族で洗礼を受けた者は、およそ140名になります」と記されている⁽¹⁸⁾。

さらに、1589年度イエズス会年報には、「浦辺の主要な殿たちの〔一人〕で、戦の折に〔キリスト教に〕深い理解を示してキリスト教徒になった岐部左近殿の妻は、夫と甚だ善良なキリスト教徒である親族の岐部ロマン *Quibe Romao* から、我らの聖なる教えのことを聞いて、キリスト教徒になることを決意しました。そして、洗礼を受けることを強く望みましたので、ロマンが洗礼を受けることを申し出ました。彼は同様の任務（洗礼を授けること）を果たすための許可をパードレたちから得ていたからです」と記されている。

すでに洗礼を授ける役を与えられている浦辺の岐部ロマンこそ、1585年洗礼を受けた浦辺で最初の「甚だ善良なキリシタン」であり、ペトロ岐部の父とすることが出来る。

「母マリア波多」

大分県東国東郡国見町岐部に住む岐部増喜氏が伝え蔵する「岐部文書」は、岐部家と大友義長、義鑑、義鎮（宗麟）と岐部家の関係を示しているが、その中に、宗麟から岐部能登守と波多備後守に宛てた一日違いの日付を有する書状が含まれている⁽¹⁹⁾。

岐部氏も波多氏もこの地方の同格の豪族であったので、ペトロ岐部の「母マリア波多」はこの波多氏から岐部氏に嫁いで来たと考えられる⁽²⁰⁾。

（3）同宿となって

ペトロ岐部の生涯をたどると、自ら「入会の動機は、私の自由な決心である。すでに14年前に、自分から進んでそのような願を立てた」と記している通り、ひたすらイエズス会入会、司祭叙階を求め、そのためにはいかなる艱難も耐える覚悟であったことは明らかである。

1620年に書いたと思われる身上書に、「当年33歳」と記され、〔14年前〕にイエズス会入会を希望して、「マスカレニャス神父作成の誓願文を使って誓願を立て」たと述べているのは、セミナリヨでの学業を終えた時点ではイエズス会入会をまだ認められなかったが、同宿として誓願を立てたと考えられる。巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、「日本では同宿と言う階級のこの人たちは老若を問わず、教会の仕事をするために、頭髪を剃り、世間を棄てる。ある者は本会の者、

あるいは聖職者になる目的をもって勉強し、またある者は、日本では剃髪した人たちだけでしかおこなわれない家の中のいろいろな仕事、たとえば納室係りの役目…教会儀式の侍者、神父の随行などをしている。能力のある者は教理の説明や説教や布教の仕事を手伝っている。この同宿たちは日本では尊敬を受けて、教会の人と目されている。彼らは『道服』を着ているが、その様式は神父や修道士が着ているのとは違っている」と書いているが、ペトロ岐部が聖アンドレア修練院に入ったときの所持品に「道服」が含まれていたという記録は、ペトロ岐部の身分を証明しており、「ペトロ・カスイ」と自身が名乗り、欧文史料に常に「ペトロ・カスイ」となっているのは、同宿となって、剃髪したとき、日本の習慣で「カスイ」という号を得たのであろう⁽²¹⁾。

同宿となったペトロ岐部は、どのような仕事を担当していたのか。その手がかりの一つは、ローマのイエズス会本部文書館に保管される「至福なるマティアスの指について」の証言記録である。

日本の筑前国秋月において、1614年3月にマティアスという名の著名なキリスト教徒が信仰のために殉教を遂げました。日本人である私ペトロ・カスイは彼の遺体をみずから手で墓から掘り出し、木箱に納めて、長崎の町のイエズス会のパードレたちの許に運びました。彼の殉教以後すでに20日が経過していたにもかかわらず、その途中ばかりでなく、パードレたちによって埋葬された時にはさらに、新鮮な血が死体から多量に流れていたもので、皆はたいへん驚きました。私は彼の指を1本切り取りました。これは、私がキリストにおいて最も敬愛するイエズス会ポルトガル関係補佐ヌニョ・マスカレニャス神父に渡した物であることを聖なる福音にかけて誓います。

と述べている⁽²²⁾。

秋月の地元の殉教者の遺体を掘り起こし、長崎に運ぶことができたということは、すでにペトロ岐部が秋月の信徒たちとかかわりを持っており、信頼されていたことを伺わせる。秋月だけでなく、同宿として、各地を駆け巡っていたと考えられる。

徳川幕府の禁教令が発せられて、京坂地域の宣教師と主なキリシタンは国外追放のために長崎に送られ、京都では教会堂の破壊がすでに始まっていた時期、秋月の殉教者の遺体を長崎まで運んだことが、ペトロ岐部の意思で行なったことか、宣教師の指示によるのかは明らかでない。いずれにしても、重要な任務を果たす同宿であったといえよう。

(4) 苦難の道—国外追放からローマへ

1614年の報告に、「日本の支配者である内府Daifuが私たちを悉くカオに追放した時、管区長は選りすぐったセミナリオの同宿と古参の伝道士とからなる同宿40名以上を連れて来ましたが、それは、日本に〔再び〕戻った時に彼らが直ちに迫害中のそのキリスト教界を援助することができるように、彼らを保持し適応性を身につけさせるためでした」⁽²³⁾、と記されているが、ペトロ岐部はこの40名の中に含まれていた。

その後、「彼らのうちのある者たちは信仰のために日本から追放されたとの口実でヨーロッパさらにローマに渡航しようとしています。当初は、それは信仰のためでしたが、しかし今はこの若者

たちの主なる望みは聖職者clerigosになることであり、叙階された者として日本にもどることです」と巡察師フランシスコ・ヴィエラは、ローマの総長補佐マスカレヌアスに書き送っている⁽²⁴⁾。

巡察師は、そのことを単なる名誉心によるもので、将来の禍の種になるので、聖職者にしないよう訴えているが、ペトロ岐部の司祭志願は、迫害に苦しむ日本の教会のためであったことを彼自身の行動が示していくことになる。

これらの書簡の記述をたどっていくと、先に述べたペドロ岐部の叙階に行きつくのである。

ペドロ・モレホンがコインブラからローマのマスカレニャス宛に1620年9月2日付で送った書簡は、その年、「二人の同宿…すでに哲学の学士であり、かつ善良な学生」がコインブラに来ており、巡察師ヴィエラの後に「起こりうる」いくつかの厄介事を懸念して司祭叙階に反対する書簡も届いているにもかかわらず、モレホンはポルトガルの管区長に話し、「倫理神学を聴講することができるよう、またはイエズス会に入れるように努力しようとしています」と日本人同宿のために尽力する様子を伝えている。

(5) 司祭叙階とイエズス会入会そして帰国

そして、先に述べたように、その年10月にはローマで剃髪式を受け、11月1日、「ペトロ・カスィは許可状なしに云々…試験によって適性を確かめられたうえ、…副助祭の聖品を受け」、司祭叙階へと進んでいった。ローマまでの経緯については、マカオからインドに行き、「ペルシアを横断してエルサレムまで来た。そこで聖地を訪問し、それからローマまでの行脚が続いた」と1660年にローマで刊行されたダニエッロ・バルトリ著『日本イエズス会史』に記されている⁽²⁵⁾。恐らく、聖地巡礼をした最初の日本人であろうといわれている。

ペトロ岐部が、それまでの体験をどのように受け止めていたかは、身上書に述べている「神は私に特別に豊かな限りない賜物を授けてくださった、と確信している。なぜなら、私はさまざまな労苦や危険から解放されて、ついにイエズス会の修練者に加えてもらったからである」という言葉に要約されている。

次に、ペトロ岐部は、「私は自分の召命について満足しており、自分ならびに同胞の救霊（魂の救い）のために進歩したいという大きな希望をもっている」と身上書に記したように、「迫害に苦しむキリスト教界を援助するために日本にいくべく神によって召し出されたのである。そして彼は、そのことを少しも怖れず、また堪えることも意に介さず、海路1万8千マイルの長旅の危険も怖れず、またすでに日本において実行されていた福音の司牧者を殺す酷しい方法をも全く怖れなかった。そして、彼は総会長ヴィテレスキに対して帰国する〔許可〕を求めて許された」⁽²⁶⁾

その後のことについては、バルトリの記述と1623年2月1日付ペトロ岐部自身の書簡によると、1年半あまりの修練の後、1622年6月6日ローマを発ちリスボンに向い、9月7日エヴォラのコレジオに到着、数日間休養した。そこからリスボンに行って修練院で修練期を完了し、1622年11月21日聖母マリア奉獻の祝日（ペトロ岐部の書簡には *in die Purificationis B. Mariae*と書いているが、エヴォラの修練院に2ヵ月半滞在して誓願を立てたという記述と合わせると、11月21日の聖母マリア

奉献の祝日であろう)に、清貧・貞潔・従順の三誓願を立て、正式のイエズス会員となった⁽²⁷⁾。

いよいよ帰国の途に着き、インドに向けてリスボンを立ったのは1623年3月24日、5月28日にゴア到着、1625年9月1日から11月15日の期間にマニラを経てマカオに到着している。

1627年2月、「日本へ渡航する手がかりをどうにかして探すため…マラッカに向かって航海し、そこからシャムに進もうとしてシンガポール海峡付近で4隻のオランダ船に」襲われ、「私はただ聖務日祷書、外衣、神父たちの手紙だけを携えて、ポルトガル人たちと一緒に陸に」上がった。「14日間歩き回った後にマラッカに着いた」とペトロ岐部はマスカレニャス宛書簡に記している⁽²⁸⁾。

この書簡の中でペトロ岐部は「ジュリオ・チェザール・マルジコ神父とアントニオ・カルディム神父と日本人の西ロマン修道士が居住しています」とも書いている。このカルディムが後にペトロ・カスイの殉教について書き残している。

そして、同書簡によって「(1627年)5月1日にマラッカを去り、同年7月末にシャムに到着した」ことを知ることが出来る⁽²⁹⁾。

「シャムの首都はユディア(アユタヤ)と称し、この都市は人口が非常に多いです。私は日本人町に所在する善良なキリスト教徒の家に逗留していました」と書き、また、ここに2年以上滞在したという。ファン・ロペスは、「そこ(日本)に入国したいと希望し、また入国しようと努力しているヨーロッパの司祭たちだけでなく、日本人司祭たちまでが入口を見出せないままです」と記し、「パードレ・ペドロ・カスイは日本に渡航するためにシャムで2年以上も下僕の衣服を身に付けて変装していましたが、日本に渡ることはできなかった」と禁教令が厳しく宣教師を阻んでいる日本の状況を記している⁽³⁰⁾。

アントニオ・フランシスコ・カルディムは、その著『日本の精華』(ローマ、1646刊行)のなかで、この「下僕の衣服を身に付け…」をさらに詳しく、「彼は直ちにモザンビーク、マラッカ、シャムを訪れました。そこで2年間裸足で頭髪を剃った頭で船体の長い船の漕ぎ手席で漕いでいました。このようにして、恐らく密かに故国に渡航することが出来ると考えていました。しかし、成功しなかったので、新しい計画をもって奴隷となってマニラへ渡りました。それは、彼を見張っていた人たちの眼を欺くためでした」と記している⁽³¹⁾。

「マニラの総督閣下から遣わされた船が来ました。この機会に私はフィリピン諸島に行くことができ」たといっている。その日付は、アユタヤと一緒にいたカルディムが、「1629年の聖母訪問の祝日に、私は前述の国を出ました」と記す、聖母訪問の祝日、すなわち7月2日であろう⁽³²⁾。

1630年3月2日にマニラを出発したと述べている。

そして、ペトロ岐部は、1630年6月12日付でマニラのコレジオ院長ファン・ロペス宛書簡をルパング島で認めている⁽³³⁾。

その書簡の中で、「マニラを出発してから…すでに3ヶ月が過ぎた」が、「その間、海岸に建てられた小屋において…毎日ミサをささげている」と報告している。

というのは、1630年春、マニラでミゲル松田神父と一緒に船を一隻買い、キリシタンの水夫を雇って3月2日マニラを出発し、ルパング島で航海の準備をした。ペトロ岐部は、そのルパング島

から5月7日付の書簡を総長補佐マスカレニャスに送り、「いつも6月頃になる航海に適した天候を待っています」と報告している⁽³⁴⁾。

しかし、6月12日付のマニラ・コレジオ院長ファン・ロペス宛書簡はまだルパング島発となっている。その理由を、「すでに3ヶ月間このルパング島に停泊しており、…なぜなら、すでに万端の準備がなされた時、つい最近のことですが、船が白蟻、というよりはむしろ虫に喰われて穴があき、それも現在では手の施しようがないと思われるほどになっていることが分かったのです」と説明している⁽³⁵⁾。

ペトロ岐部の手紙は続く。

作業を完了させるにはわずかな日数しかありません。従って、私たちは船に内側から板を固着させ、ブリナンまでためしに航行することを決定しました。そのようにして、もしもその応急措置がうまくゆくならば日本までまっすぐに進航いたします。…私は尊師に対して、聖なるミサと祈りのうちに神が私たちの旅行と企てに保護を与え給うよう、懇願してくださることを切願いたします。私たちは、神の御旨によって〔航海のための〕順風を信じているために出航いたします。そして、この事柄に対して〔神が〕私たちのためにやがて風を吹かせてくださることを、私たちは信じています。私たちが法外なことを行なわず、また私たちの過ちのために神が私たちを見放し見捨て給うことがなければです。…

ルパングより、1630年6月12日

キリストにおける尊師の不肖なる下僕 ペトロ・カスイ Petrus Cassinus

ペトロ岐部自身の書簡はこれが最後となる。この最後の書簡は、「1623・29及び30年の日本事情概要報告」にスペイン語に翻訳して記載されたが、ファン・ロペスは、ペトロ岐部がラテン語で認めた書簡を「彼が表現している味わいを失わないために、これを挿入します」といっており、1631年メキシコで刊行されたペドロ・モレホン著『1627年の日本殉教者報告』の巻末の付録として、ラテン語とスペイン語の書簡が載せられている。

(6) 日本潜入から殉教へ

「昨年当地から出発したパードレのミゲル松田とペトロ・カスイが無事に日本に入ったことを、私たちは先日、使節と一緒にその地から到着したポルトガル人の貴族から知らされました」と、1630年度イエズス会フィリピン管区年報は伝えている⁽³⁶⁾。

また、レオン・バジェスは、1629年の出来事として「同じその頃、〔イエズス〕会の神父、ミゲル松田⁽³⁷⁾とペドロ・カスイは、上長が購入した船に乗り込んでいました。乗組員は追放されたキリスト教徒からなり、彼等は困難な企てに身を捧げたばかりでなく、殉教の機会に身を委ねました。船が恐ろしい嵐に見舞われて七島附近の海岸で壊れた時、船は日本と同じ緯度にありました。遭難者たちはこの国の小船1隻を手に入れることが出来ました。そして、土地の士卒たちの監視のもとに薩摩の港である坊津に達しました。彼等は、役人たちの面前に連れて行かれた時

には、商人の名義で通されました。そして、天下に入り込みました」⁽³⁸⁾と日本上陸時の状況を詳しく述べているが、ペトロ岐部自身がルパンで1630年に書いた手紙の日付から考えても、日本入国が1629年には有り得ない。

坊津に上陸したペトロ岐部とミゲル松田がどのような行動をとったのかは、厳しい禁教令で残留した宣教師の行動も極度に制限されていたために、ほとんど知ることが出来ない。マノエル・ディアスがマカオからローマに送った1636年12月16日付の書簡には、ペトロ岐部が長崎に来て、1633年に逆吊りの拷問で転んだクリストヴァン・フェレイラに棄教したことを取り消すよう助言したと書いているが、ディアス自身がこの情報がどれくらい確かであるか疑問をもっている。

さらに、1638年12月3日付のディアスの書簡には、ペトロ岐部がポルロ神父とともに存命していること、ペトロ岐部が長崎から薩摩に移動したと伝えているが、この年にポルロ、式見の両司祭は拷問にあい、棄教している。

そして、翌年にはペトロ岐部は仙台領内にいた。ここが彼の司祭として最後の活動の地となった。

1639年3月17日付「訴人状」は、ペトロ岐部が水沢の三宅藤衛門宅に身を寄せていたことを明らかにしている。

宮城県立図書館所蔵写本「伊達氏史料 一輯」に収録されている「長三郎訴人〔覚〕」に、
仙台領水沢と申所ニ三宅藤衛門と申者、夫婦共ニきりしたんニ而御座候。年五十計ニ罷成候。
男子壱人年二十計罷成候。木部宿をいたし候故、宗門之儀ニ存候
とある。

水沢は、伊達藩の所領で、石母田大膳の知行地であったが、すぐ近くに、伊達政宗の家臣で奥州のキリシタンのリーダーであった後藤寿庵の領地、見分があった。1615年に、イエズス会のアンジェリス神父が東北地方の宣教を本格的に始めたとき、後藤寿庵の仙台屋敷と見分はアンジェリスはじめ他のイエズス会宣教師の活動の拠点となったところであった。1624年、後藤寿庵は追放されたが、このような訴状によって、寿庵がいなくなっても信徒たちが宣教師を匿うところであったと知ることが出来る。

ペトロ岐部も水沢で司祭として活動していたことを、また、幕府が宗門改めを強化し、1638年10月に下達した〔訴人懸賞〕の高札が功を奏したことを読み取れるものである。

天理大学付属天理図書館所蔵の「石母田文書」に含まれる「宿次手形(写)」もその消息を伝える。

此囚四人仙台より江戸へ召寄候而、宿次ニ以人馬送之、泊にてハ不闕落様に、其所より番をいたし、急度可送届者也。

寛永十六卯

三月廿五日

対馬

豊後

伊豆

ここにいう「此囚四人」とは、仙台領内で捕縛されたと「契利斯督記」に出てくる、イエズス

会ペトロ岐部とマルティニョ式見、フランシスコ会フランシスコ・バラヤス、自首して捕らえられたというイエズス会ジョアン・バプティスタ・ポルロの四人であろう⁽³⁹⁾。

1638年島原の乱が収まると幕府は、10月、全国にキリシタン禁令の高札の掲示を義務付けた。高札には、伴天連を訴えると銀200枚の賞金が訴人に与えられると記されていた。幕府の厳しい命令で宣教師の拠点となっていた伊達藩では伴天連訴人に幕府の賞金よりも上の黄金10枚の賞金を与えるという高札が1639年1月18日付で出された。

この訴えによってペトロ岐部ら4人の宣教師が仙台で捕らえられたと考えられ、さらに石母田文書は、捕らえられた宣教師たちが江戸送りとなったことを伝えている。

彼らの取調べに当たった初代宗門改役となった大目付井上筑後守政重の記録である『契利斯督記』⁽⁴⁰⁾は、

大猷院様御代、嶋原一揆落城以後、従仙台伴天連寿庵、マルチイニヨ市左衛門、キベヘイトロ召捕参候、評定所へ四度出候へ共、御穿鑿極り不申、其後、讃岐守下屋敷江被為成、三人の伴天連被召出、澤庵、柳生但馬其外寄合、宗門の教御尋、二三日過、中根壹岐守为上使、筑後守に被仰付、右三人之者共評定所江出シ不申、筑後守一人ニ穿鑿仕候由⁽⁴¹⁾。

と記し、

姉崎正治著『切支丹宗門の迫害と潜伏』には、文中にいう「讃岐守下屋敷へならせられ」は、将軍家光が酒井大老の下屋敷へ行ったことである。寛永16年中に将軍の酒井邸御成は少なくとも6度、その記事にはバテレンの事はないが、多分3月（11日と25日）の事と思われる。その結果、キリシタン事件を井上筑後に任せることになり、御側衆である中根壹岐守が上使として命を伝えたのであると追記されている⁽⁴²⁾。

江戸に着いたペトロ岐部らがいかなる尋問にも屈しないため、将軍家光自らに呼び出されて吟味を受けた。その場所は、老中酒井讃岐守忠勝の別邸、居並ぶ人は将軍のほか、老中酒井、東海寺の禅僧沢庵、柳生但馬守宗矩という、最高レベルの吟味であった。

2、3日後、ペトロ岐部は宗門改役井上筑後守に任せられ、そこで拷問が始まったという。

記録は続いて、

右三人の伴天連共、筑後守所ニ而十日、切支丹の法穿鑿致し、十日過三人之伴天連、籠屋ニ而筑後守家頼を遣し嗽問申付、コンパニヤ寿庵、マルチイヨ市左衛門コロハセ念仏を申させ候由、其後、筑後守所江へ召寄、一兩年指置候所ニ、二人共病死仕候と、二人の宣教師が棄教したが、解放されず、筑後守の屋敷に留めおかれ、1年ほどで病死したという。

一方、ペトロ岐部については、

キベヘイトロはコロヒ不申候、ツルシ殺され候

と、逆吊りの拷問で殉教したことを、井上筑後守自らが証言している。

また、その頃平戸のオランダ商館長であったフランソア・カロンは1639年11月2日の日記に、次のように書いている。

ペトロ岐部のことを「キベと称する坊主野郎」と呼んでいるので決して好意的ではないし、情報は幕府側から得たものであるから信憑性がある。

この夏、政宗の領地で捕らえられ、最近、江戸で死に至るまで苦しめられ、拷問を受けた。あらゆる拷問が彼に課せられたのち、彼の裸の腹の上に、乾いた薪木の小片がおかれ、ゆっくり火がつけられた。このため彼の臓腑は彼が死に至る以前にほとんど身体から飛び出した。このようなすべての苦痛の間、彼は絶えず信仰について尋問された⁽⁴³⁾という。

1639年11月2日付、マカオ発アントニオ・ルビノの総会長宛書簡⁽⁴⁴⁾に、

パードレ・ペドロ・カスイは過酷な拷問と全身にあてられた真っ赤な金属片を耐え忍んで、キリストの偉大な騎士として死にました。人々が付け加えて言うには、彼は行きながら焼かれ、ついには彼はその忍耐によってすべての人たちを驚愕させました。
と、ローマのイエズス会総会長に報告している。

Ⅲ、ペトロ岐部の今日性

「召命は愛のしるしであり、また愛への招きでもあります」

(ヨハネ・パウロ2世、1986年2月10日インド訪問の際プーナでの説教)

2000年8月15日から20日まで、教皇様の呼びかけで開催されたワールド・ユース・デイ「国際青年の日2000年ローマ大会」で、教皇ヨハネ・パウロ2世は、世界中から集まった200万人の若者に、

- 1、恐れなくて 希望の扉を開きなさい
- 2、どこにおいてもミサを捧げる司祭が欠けることはありませんように。あなたたちの間で、司祭職へのたくさんの召命が花開くよう、私は神に祈ります。
- 3、新しい世紀には愛の文明を建設すること。
恐れなくて21世紀の聖人にならなさい。

と呼びかけた。

また、「現代社会を動かしているエゴイズムと暴力に対して、愛が支配する社会を建設しなさい」と諭した。東京教区の森補佐司教はこれを解説して、「愛の文明とは、経済的な豊かさを最優先にして、人々の心を毒してしまっている価値観とも異なるものである。それは、神のまなざしのもとに、かけがえのない一人ひとりの人間の命の尊さに視点をおき、奉仕と犠牲の祈りで互いを生かしあう文明である」と言っている。

ペトロ岐部が身上書に、「自分の召命に満足しており、また自分の救霊および同胞の救霊のために進歩したいという大きな希望をもっている」と記しているのは、まさに教皇ヨハネ・パウロ2世が若者に希望する、「愛の文明の建設」という言葉と同じ意味をもっている。

また、ヨハネ・パウロ2世は、「キリスト自身がしたように、他人のために自分自身を犠牲にす

る覚悟を証しなさい。現代の社会はどうしてもこの証を必要としています」と論じた。ペトロ岐部の時代と同じく、現代こそ、殉教の証がもとめられている。

教皇は続けた。

特に、安易な楽な生活、麻薬や快楽主義の誘惑をしばしば受け、やがて、絶望、虚無感、暴力の淵に落ち込んでいく若者たちがその証を必要としています。このような若者の問題を、正義、連帯、社会への奉仕、人間にふさわしい未来を築くための働きへと方向転換することが現代社会への証である。

そして、「信者らしく生活することはとても難しいことを私は知っています。…21世紀の聖人になることを恐れなさい」ともいった。

まとめ

現在までに発表されている史料によって、ペトロ岐部の殉教までの道のりを追った。17世紀初頭の、社会的には平凡な一人の日本人について、ヨーロッパ側の史料と日本側の史料がこれほどに多く残され、また両者の証言が一致している人物はあまりいない。

そして、史料が語るペトロ・カスイ岐部の人生は、単なる歴史的物語ではなく、歴史に翻弄されながらも意志を貫き、夢を実現した一人の人間の歴史であり、しかも、現代の教皇が若者に求める生き方を17世紀に実践した一人の日本人であり、現代人に道を示す実践の模範でもあると言うことが出来る。それは、殉教をもって「愛は死よりも強いことを証明した」日本の188名の殉教者を、「神への愛と隣人への愛に基づいて、自分の生涯をつくりかえるよう刺激を与える」聖なる人々として、教会と世界を真の愛の世界につくりかえる模範として、列福・列聖する今日的意義を教えている。

注

- (1) 2005年現在は1980年ヨハネ・パウロ2世によって列聖された長崎16聖人がいる。
- (2) 溝部脩「日本殉教者列福の促進」(1987.2.15「カトリック新聞」)
- (3) Leo Magnino, Pontificia Nipponica, Roma 1947, pp.145-146
- (4) Ibid.,2, p.43-57
- (5) 日本188殉教者列福歴史委員会編『キリシタン地図を歩く 殉教者の横顔』ドン・ボスコ社 1995年、pp.215-217参照
- (6) 日本カトリック司教協議会 教会行政法制委員会訳『カトリック新教会法典』1992年、1186条
- (7) 初めはキリストの生涯とその復活を目撃した「証人」という意味で、キリストの使徒たちのことを指していた。ローマにおいてキリスト教迫害が始まり、それが激しくなるにつれて、敢然とキリストの教えを宣言し、そのために命をささげた人々のことを指すようになった。教えのために苦難に耐えて生き残った人びとを「証聖者」と呼び、古代の教会においては特別に尊敬された。殉教者に対する尊敬は初代教会より厚く、信者は彼らを信仰の証人として崇敬の対象とした。 溝部 脩「カトリック新聞」1987.2.15
- (8) 列聖または列福の調査は対象者死去後5年とされているが、1997年9月5日に逝去したマザーテレサについては、年内の10月23日カルカタ教区のヘンリー・デスーザ大司教がバチカンに列福調査開始の規範

- の例外的免除を嘆願、1998年12月12日、教皇庁列聖省が教皇の承認を得て、規範の免除を許可。この決定は翌年3月に公表された。2002年4月26日同教区の調査報告書が列聖省に提出され、12月29日マザーテレサの列福が承認され、2003年10月19日聖ペトロ大聖堂において教皇ヨハネ・パウロ2世は列福式を挙行された。これは例外的な早さであったが、現教皇ベネディクト16世は、2005年5月13日、故ヨハネ・パウロ2世の列福調査の開始を許可すると発表、教会法の規定を免除した。その帰天からわずか40日であった。
- (9) ヨハネ・パウロ2世教皇が長崎の西坂を訪問されたときのエピソードがある。教皇の姿を追いつける報道陣の中で、殉教者の碑の前にひざまずいた教皇は、「私は殉教者の声を聴くためにここに来ました。殉教者の声が聞こえるように、今は静かにして欲しい」と求められたのである。
- (10) カトリック広報委員会監修『教皇ヨハネ・パウロ2世 訪日公式メッセージ』中央出版社1981年、pp.125-128.
- (11) 調査の結果、列聖または列福に値すると立証されると、その人物が所属した教区の司教または修道会が教皇庁に定められた書類を提出する。列聖省は教皇庁において行なわれる教会法上の手続きを監督する。列聖省*Congregatio de Causis Sanctorum* とは、教皇パウロ6世によって1969年礼部聖省が2分され、典礼省と分かれて設置された。1975年に独立した省になった。
- (12) 原文：大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 ペトロ岐部カスイ 資料集』大分県教育委員会刊、1995年、p.55、翻訳文：同、p.162.
- (13) *Archivum Romanum Societatis Iesu*, Rom., 172, f., 200r, 『大分県先哲叢書』p.165
- (14) 同宿になって頭髪を剃り、道服をまとったとき、神に奉仕する新しい生き方の出発として、名を「号」に変えたと考えられる。ローマ字でCasuiまたはCassuiと書かれているので、使われた漢字は不明であるが、可水と当てはめる人や、当時のイエズス会総会長Acquaviva（イタリア語で活きた水と直訳できる）になぞらえて、活水と考える人もいる。
- (15) 訳文：『大分県先哲叢書』pp.166-167、原文p.58 *Archivum Romanum Societatis Iesu*, Opp. NN. 68, f. 40r.
- (16) H.チースリク著『世界を歩いた切支丹』春秋社 1971年、pp.208-209
- (17) 1584年9月3日付、長崎発、ルイス・フロイスの1584年度イエズス会年報。
ARSI, Jap.Sin.9 II, ff. 283v. 『大分県先哲叢書』p.91.
- (18) 1585年8月20日付、長崎発、ルイス・フロイス、イエズス会総長宛書簡、『大分県先哲叢書』、pp.92-93. その他、ルイス・フロイス著『日本史』第2部第17章および第27章参照。
- (19) 『大分県先哲叢書』、p.45、51、52。
- (20) マテウス・デ・コーロス筆「1612年度イエズス会日本年報」に、熊本に住む甚右衛門ロマンとその子息ペドロと弟が迫害のために追放されて長崎へ移住したことが述べられていて、家族構成は一致するが、「14年前に願を立てた」と記すペトロ岐部自身が書いた身上書の内容から考えると信憑性が薄い。『大分県先哲叢書』にも、ペトロ岐部がその年に熊本の家族とともにいたということは、「ペトロ本人のことばにふさわしくなく疑義を残す。参考のために収録した」としている。P.29。1617年度イエズス会年報に記される殉教者岐部五左衛門ジョアンは、ペトロ岐部の兄弟と推定される。
- (21) H.チースリク、前掲書、pp.211-212。
- (22) ARSI, Jap.Sin. 6, I, 133r, 1620-1622年のローマ滞在中に書かれた「聖遺物に関するペトロ・カスイの証言」、『大分県先哲叢書』p.106.
1614年10月25日付 長崎発 ガブリエル・デ・マトス 総長宛「1614年度イエズス会日本年報」には、マティアスの殉教報告のなかで、「さて、その亡がらは切り離された首と一緒に、すぐその場に埋葬されたが、その夜のうちにキリシタンの衆が掘り出して、もっと相応しい場所に葬りなおした。そして、それをふたたび掘り出して、ここ長崎まで運んできて、長崎では町はずれのトードス・オス・サントスの教会に葬られた」と記す。
- H. チースリク著高祖敏明監修『秋月のキリシタン』教文館2000年、p.262。
- (23) 1616年6月10日付 マカオ発 フランシスコ・ピレスの総長宛書簡、ARSI, Jap.Sin., 17, f. 49r., 『大分先哲

- 叢書』p.134。
- (24) 1618年1月10日付 マカオ発, ARSI, Jap.Sin., 17, f. 128r., 『大分先哲叢書』 p.146
- (25) 『大分県先哲叢書』 p.235-236.
- (26) 『大分県先哲叢書』 p.236
- (27) 1623年2月1日付 リスボン発ローマの修練長オリヴェロ・ベンサ宛書簡、Jap.Sin., 34, f. 198r 『大分県先哲叢書』 168-172
- (28) 1630年5月7日付 ルパング発 総会長補佐マスカレニャス宛ペトロ・カスイ書簡、Jap.Sin., 34, ff. 201r-201v, 『大分県先哲叢書』 pp.205-209。
- (29) もう一度シャムに向かった理由について、カルディムの『栄光に輝く日本管区イエズス会の戦い』リスボン、1894『大分県先哲叢書』 p.217-218 には、
「巡察師は、…ラオスに開教しようとしていたために、日本人パードレ2名、すなわち、のちに日本において光栄なる殉教死を遂げたパードレ・ミゲル・ピネタ（松田の訳）とパードレ・ペトロ・カスイとともに日本に渡航しようとしていたパードレ・アントニオ・カルディムにマニラからマカオにくるように来るように命じました。…日本に渡航しないように彼らに命じました。この目的のために、前述のパードレ・アントニオ・カルディムもまた、アンナンの国を経由してラオスに入るために、集めるる街道の情報を蒐集するため、2人のパードレと一緒にアンナンに行き、ケチョの城下へ赴くように指名されました。3人のパードレは1631年2月13日にマカオを出発しました」と記すが、この日付けは間違っている。
- (30) 『大分県先哲叢書』、p.213
- (31) 同上 p.244
- (32) 1653年8月15日付ネグンボにおけるパードレ・アントニオ・フランシスコ・カルディムの覚書リスボン・アジュダ図書館 Biblioteca da Ajuda, 49-14, ff. 724v-725r 『大分県先哲叢書』、p.248。
- (33) ベードロ・モレホン著『1627年日本殉教報告』付録。『大分県先哲叢書』、pp.210-212。
- (34) ARSI, Jap.Sin., 34, ff. 201r-201v, 『大分県先哲叢書』、pp.205-209。
- (35) 『大分県先哲叢書』、p.211
- (36) 1631年6月29日付、マニラ発、ヨアンネス・デ・ブエラス、『大分県先哲叢書』、p.221
- (37) ミゲル松田 天草の出身。1578年生れ。6年間セミナリオでラテン語を習い、1607年にイエズス会入会、セミナリオでラテン語を教えた。1614年マニラに追放され、1621年司祭叙階の許可を得たが、叙階された年は不明。マニラからマカオへの渡航中に中国沿岸で逮捕され、牢屋に投ぜられた。いつ解放されたか分からないが、1629年岐部神父がマニラに来たときに会い、一緒に日本に帰ることを決意した。帰国して長崎で働いていたが、病死。
- (38) レオン・パジェス著吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』下、岩波書店1938年、p.117-118
- (39) 1634年3月20日付、マカオ発のアンドレ・バルメイロの書簡では、日本にイエズス会パードレは、ゼバスティアン・ヴィエラとジョアン・バプティスタ・ポルロおよび人の日本人司祭がいると報告されている。すなわち、ペトロ岐部、ディオゴ結城、マルティーニョ式見、マンショ小西である。セバスティアン・ヴィエラは1632年フィリピンから潜入したが、翌年大坂で捕らえられて大村に送られ、1634年江戸送りとなって、逆吊しの後、火あぶりの刑で殉教した。従って、1636年7月30日付、マカオ発のマノエル・ディアスの書簡にヴィエラの名はなく、ジョアン・バプティスタ・ポルロ、マルティーニョ式見、ディオゴ結城、マンショ小西、そしてペトロ岐部の5名のイエズス会員の名が記されている。(『大分県先哲叢書』 p. 225)
- (40) 『契利斯督記』は、井上筑後守政重が初代宗門改役にあったときのキリシタン調書などを中心に取り調べ記録と文書類を後任の方丈長氏が取調べの参考として就任後にまとめまとめたもの。姉崎正治著『切支丹宗門の迫害と潜伏』図書刊行会1976年に収められている。
- (41) 『大分県先哲叢書』、p.6
- (42) 姉崎正治著『切支丹宗門の迫害と潜伏』図書刊行会1976年、p.74
- (43) 『大分県先哲叢書』、p.231
- (44) ARSI, Jap.Sin., 38, ff. 212r-212v, 『大分県先哲叢書』 p.232